



写真10 蓋石がずれたため棺身の表面が剥離した  
天水経塚古墳の舟形石棺(20160630)



写真11 修復中の天水経塚古墳舟形石棺(20180216)、  
埋没していた下半部器面の遺存状態がきわめて良好



写真12 2018年6月18日の大阪府北部地震で破損した  
今城塚古墳復元家形石棺の棺蓋(20180726)



写真13 倒壊した石之室古墳の家形石棺(20160717)、  
以前から亀裂があったとはいえ、棺身の下半部しか埋没し  
ていなかった前方の方が大きく倒壊していることに注目



写真14 以前の江田船山古墳の家形石棺(20070613)、  
棺外をみれば、棺身下半部のみが土中にあり、  
上半部が露出していることがよくわかる



写真15 2019年1月3日の地震で破損した  
江田船山古墳家形石棺の棺身石材(20190314)、  
亀裂は埋没箇所と露出箇所の境界付近に生じている

### 3. 石室の破損から学ぶ

#### (1) 石室を覆う墳丘盛土の薄さー墳丘のやせ(盛土の流失)ーと石室破損との相関関係(嘉島町井寺古墳)【写真4~6】

→平時に、レーザー探査などで盛土の遺存状態を確認しておくことの重要性。

#### (2) 災害によって破損した箇所を特定することの困難さ(あらゆる石室)【写真16~18】

→明らかに破損している場合は別だが、そうでない場合、以前からの破損なのか、災害を原因とする破損なのかの認定がきわめて難しい。

壁体のはらみの程度、わずかな石材の落下などは、実測図と見比べてみても判定が困難な場合がほとんど。

→望ましいのは、石室の3次元計測を定期的に行い、経年変化を調査しておくこと。はらみ程度の認定にはきわめて有効。

ただし予算的に難しい場合は、いくつかのポイントの座標測量を定期的に行っておくことでもよいと思う(通潤橋や大村横穴群での実践例)。

→少なくとも、石室各部の写真を定期的に撮影しておくことが重要。今後、定期的な写真撮影は石室保存のうえでの必須の作業になるのではないかな。

### 4. 装飾古墳の破損から学ぶ

#### (1) 装飾破損箇所を修復するための最適な手法を見いだせていない(すべての装飾古墳)【写真13・17・18】

→破損・落下した石材を確実に接合するための手法とは?

→顔料に悪影響を与えない接着手法、接着剤とは?

→修復のために石材を玄室外へ運び出せば、これまでの保存環境を変えることになるが、そのことにより石材や顔料にどのような影響が出るのか?

→平時から、通年かつ継続的に、石室内の温湿度変化を調査・記録しておくことの重要性。

#### (2) 石障系装飾古墳の場合、装飾された石障石材を保護することだけでよいのか、何とか石室全体を残せないのか(嘉島町井寺古墳)【写真17】

→井寺古墳の場合、きわめて危険な状態であるので、近い将来、難しい決断をせざるを得ないかもしれない。



写真16 大野窟古墳の横穴式石室(20160607)、  
玄室石材が破損・落下、前壁の一部に顕著なはらみ、  
羨道天井石の隙間から盛土が崩落、修復方法の検討中



写真17 井寺古墳(石障系装飾古墳)の横穴式石室  
(20190205、パノラマ写真)、羨道天井石が落下、玄室が大きく  
破損、きわめて危険なためまだ玄室内に立ち入れず



写真18 永安寺東古墳(壁画系装飾古墳)の横穴式石室  
(20160817)、装飾が描かれた玄室石材の破損・落下、  
修復方法の検討中